

1937年パリ万博を通して見る日本の文化発信

若山 沙絵

本研究は、戦間期の1937年に開催されたパリ万博の日本館に展示された作品を検討することにより、当時の日本の文化発信のあり様を明らかにすることを目的とする。

そのために、本研究では文献調査を行った。先行研究の結果を踏まえ、正式報告書である『巴里万国博覧会協会事務報告』をはじめ、国際文化振興会の『国際文化』、日本万国博覧会協会の『萬博』や新聞等を分析対象にし、パリ万博の概要、当時の世界情勢と日本の国内状況を概観するとともに、パリ万博における日本館の建築および展示品の傾向について検討した。

特に、展示品については、『巴里万国博覧会協会事務報告』の掲載情報を用いてその特徴を抽出した。さらに、同報告に掲載されていた「寄贈先」と「受賞者」に対して、展示品にかかる情報提供を求めるとともに、学術関連の学芸雑誌である『工芸ニュース』、『帝国工芸』、『アトリエ』に掲載された展示品の画像情報も含めて展示品の特徴を分析した。

これらの先行研究や調査結果から、20世紀前半の日本が、満州事変や国際連盟脱退などから生じた国際的マイナス・イメージから脱却するために、国際文化事業に注目していたことや、その国際文化事業の一環として参加を果たしたパリ万博において、国内で建築論争が起こり、伝統的要素と近代的要素の両方を取り入れたデザインの日本館を建設したことが明らかになった。一方、展示品には伝統的要素が強く見られ、中には過度に伝統的装飾を施した機械類の作品もあったことから、当時は、展示品を通して伝統的日本を外国に提示する狙いがあったことが明らかになった。

このように、日本館が表象する日本文化と展示品に表象される日本文化には違いがあり、前者の日本館は外国人を含め、多くの人々が賞賛しており、グランプリまで獲得していたのに対し、後者の展示品には国内から批判的意見が多く寄せられていた。両者の違いを生んだ背景には、日本館が建築家らの意見を取り入れた形で設計されたのに対し、展示品は巴里万国博覧会協会のみで決定したことが一つの原因と思われる。

いずれにせよ、こうした巴里万国博覧会協会の方針こそが適切ではなかったため、国際文化事業の目的である国際的マイナス・イメージからの脱却を果たすことができず、国際的孤立をさらに深め、第二次世界大戦へとつながっていったということもできるだろう。本研究の結論として、文化発信をする折は、その果たす役割を十分認識したうえで、適切な方針を立案することが何よりも重要である旨、指摘したい。

(指導教員 溝上智恵子)